

Y07b 地域的特性を活かしたサイエンスパブの開催

高妻 真次郎、山岡 均、島田 雅史（九大理）

ヨーロッパ各地にあるパブは、一般市民が様々な話題について気軽に語り合う場の一つとして最適といえる。近年、同じような雰囲気でも科学的話題を対話する場としてのサイエンスカフェが、世界中に広まりつつある。今年、文部科学省の施策として、宇宙と生命の関わりをコンセプトに最新の天文学の成果を示したポスター「一家に1枚 宇宙図 2007」(日本天文学会 2007年春季年会、Y11b、小阪淳 他)が作成された。これに伴い科学技術週間(4月16日~22日)では、全国各地で宇宙図を話題にしたサイエンスカフェ等のイベントが催された。

我々も4月18日、福岡市内で「サイエンスパブ」を開いた。目指したのは、地域特性を活かした、より気軽に密接的な対話の場である。福岡には古くから屋台の文化が根付いており、老若男女を問わず、初対面であっても会話を始める光景がよく見られる。そこでは日常的な会話を始めとし、政治や経済など多岐にわたる対話・議論がなされる。屋台のような雰囲気を保ちつつ、普段敬遠されがちな科学に関する話題を織り込むことで、従来の30人程度で行う短い講演とその後の質問コーナー的な対話形式のサイエンスカフェよりも、さらに密着型の対話の場を作り出すことを目指した。

4月に実施したサイエンスパブでは、ラミネート加工した宇宙図を各テーブルに配置し、コミュニケーターを含む4人程度のグループ3つで、少人数ならではのフリートーク形式の密接な対話を交わすことができた。だが、満席の状態でも新たに来店者がいる場合対応できなかった等、問題点もいくつか浮き彫りになった。今後も機会があれば、サイエンスパブを適時開催していく予定である。講演では、2007年9月までに実施したサイエンスパブを従来のサイエンスカフェと比較しつつ、利点や欠点、改善点などについて報告・議論する。